

12/5 ルカの福音書 1 章 26-56 節 「私の救い主である神」

小池 宏明 牧師

御使いガブリエルはエルサレム神殿で仕えている祭司ザカリヤに顕われた後、北部ガリラヤの町ナザレに住む女性マリアに顕われて、救い主がマリアの胎内から産まれることを告げられた。その後、マリアが詠った賛美の歌を通して、主なる神様がどのようなお方なのか読み取ってみたい。

* 歓喜するマリア

マリアの賛歌は「私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます。」(46-47 節) と始まる。ここには、マリアが主の御前に謙って、主をあがめ、ほめたたえる姿が強調されている。さらに、「たたえます」という言葉は、もともと「喜ぶ」、「歓喜する」、「狂喜する」を意味する。マリアは自分の体から産み出される「私の救い主」イエス・キリストこそ、自分にとってどうしても必要な救いの神なのだ、と大喜びしているのだ。

* 聖なるお方は正義の主

49 節「力ある方が、私に大きなことをしてくださったからです。その御名は聖なるもの、」マリアは、自分自身がまことに取るに足らない、小さい者であると自覚していた。そして、マリアは、神様が救い主を誕生させる力強いお方であり、その力あるお方のお名前が「聖である」と告白した。この表現は、主なる神様が、人間世界とは分離されていて近づき難い存在であることを表している。続く、革命が起きたかのような歌は、神の聖に基づく神の正義を示している。51-53 節「主はその御腕で力強いわざを行い、心の思いの高ぶる者を追い散らされました。権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられました。飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせずに追い返されました。」これは人間業ではない。主は低き者、貧しい者、実際に飢えている者に、御目を留めて下さるお方なのだ。

* 真実な愛を与える主

主の憐れみが繰り返し強調されている。50 節「主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます。」54、55 節「主はあわれみを忘れずに、そのしもべイスラエルを助けてくださいました。私たちの父祖たちに語られたとおり、アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れずに。」主のあわれみ(エレオス:真実の愛)とは、神の恵みが、具体的な行動となることを意味する。救い主の誕生は、まさに、主なる神様が長い沈黙を破って実際に行動を起こした結果なのだ。主の真実は、昔も今も変わりなく、ご自分の民を愛して、罪からも苦難からも救い出して下さる。主イエス様は、取るに足らない私にも御目を留めて下さった。感謝に尽きない。